

<p>上演3 2025年7月26日（土）3校目 中部日本ブロック（三重） 高田高等学校 「第76回中部日本高等学校演劇大会 文部科学大臣賞受賞作品」</p>	<p>第49回全国高等学校総合文化祭演劇部門 第71回全国高等学校演劇大会 講評文 生徒講評委員会 担当委員 香川県立観音寺第一高等学校 渡邊 凜音</p>
----------------------------------------------------------------------------------------------------	----------------------------------------------------------------------------------------------------

唯一無二の親友であるミサキとカナデ。しかし、突然カナデというかけがえのない存在を失い、絶望に打ちひしがれるミサキ。この作品は、そんなミサキが仲間たちに支えられて再生に向かっていく物語である。

幕開きからミサキとカナデの仲睦まじい日常の様子から劇が始まる。カラオケで歌うカナデをミサキが愛おしそうに見ていたり、2人で世間話で盛り上がったりと2人の世界に入り込んでいた。またお互いの好きなところを言い合っている姿がとても微笑ましかった。だが、徐々に不穏な空気が流れ始める。カナデを探そうとするミサキを何らかの方法で必死に止めようとする他の演劇部員たち。物語が進んでいくうちに「カナデはいない」という現実を突きつけられる。大切な人の不在を受け入れられないミサキは、その事実を受け入れられず、彼女の内で時間が止まってしまっていた。カナデのことを忘れなければならない、諦めなくてはいけない。でも、忘れたくないと葛藤し、激しく抵抗するミサキ。その姿にとても胸が痛くなった。そんな現実をなかなか受け入れられず、拒否するミサキに最後まで寄り添っていたのは、仲間である演劇部員たちだった。初めは間接的に変装をしたり新聞部の取材と偽り、やんわりと真実に近づけていくが、最後にはまっすぐに現実と向き合っていく。そんな懸命な姿と仲間を思う絆に心が震えた。

劇中では、地震を思わせる地響きのような轟音が何度も鳴り響く。その音に恐怖と圧迫感を感じた。また、ブルーシートを巧みに使い、2人の思い出を隠す意味合いと、津波に飲まれたカナデの両方を表現した手法は、暴力的かつ残酷にも思えた。その中に何が隠されているのかを私たちは知っている。ミサキの届けたいのに届くことのない声がホール中に響き渡り、観ていてとてもやるせない気持ちになった。しかし、演劇の力があったからこそ、2人は再び海で出会うことができた。私は2人が再び会うことが出来たシーンで照明が一気に明るくなつたことにより、2人の明るい未来が見えたように思えた。また実際の世界では出来ないことが演劇ではでき、何にでもなれるという希望を持つことができた。

地震は自然災害であり、いつ来るかなんて予測できない。それに改めて気づいた時、私も同じ経験をするかもしれない恐怖を覚えた。突然、大切な人が目の前から消えた時、私はその現実を受け入れられるだろうか。もしかしたら、ミサキのように現実を見て見ぬふりをして、心に蓋をしてしまうかもしれない。震災を忘れてはいけない、風化させてはいけない、とメディアは盛んに訴える。私も、大きな災害が起きたことは忘れてはならないと思う。しかし、この作品は、忘れて生きなければならないという、真逆のテーマを私たちに提示していた。過去に囚われながら忘れないでいるべきか、過去と決別して前に進むべきなのか。どちらが良いとか悪いといった物差しで測ることのできない難しい問題を私たちに突きつける作品だった。

